

招待席 短歌

## 折口春洋

おりくちはるみ 歌人、国文学者。1907-1945年。石川県羽咋市（現）生まれ。1944年、折口信夫（歌人名・釋迢空）の養子となる。太平洋戦争中、2度の召集を受けて、硫黄島で1945年戦死（陸軍中尉）。折口信夫が羽咋市に建てた父子の墓の墓碑銘には、「もつとも苦しき たゝかひに／最もくるしみ 死にたる／むかしの陸軍中尉 折口春洋／ならびに その父 信夫／の墓」と刻まれている。掲載作は、1953（昭和28）年刊行の歌集「鴿が音」（角川書店刊、約1800首収録）のうち、昭和18年から19年の150首を1978（昭和53）年刊行の中央公論文庫版から抄録した。

たづね  
「鴿が音」抄

**文藝館編集部注：**ルビないし（）内のカタカナは、原文のまま。（）内の＊カタカナは、ひらがなの英語表記、ルビないし（）内のひらがなは、電子文藝館編集室が付した。また、歌集には、編纂・出版への労をとり、なかなか進まない出版を待ちながら、戦前から戦後まで8年間に書き溜めた養父・折口信夫（釋迢空）の「追ひ書き」が、都合「その五」までであるが、息子の生死の境を挟んで、父親としての真情が最も溢れていると感じられる「その三」を作品の末尾に付記した。

昭和十九年 ——五十首——

この日頃 一

アカトキ マヤミ  
暁の寒き真闇に 別れたるかの下士官は、到りつらむか

雪ほのに見えて しづもる向ひ山。 暗きに起きて、兵を發<sup>タ</sup>たしむ

健やかに征きてかへれと 告げて後、たち征きにしが、まだ暗き<sup>ニハ</sup>営庭

若くして心<sup>こころ</sup>真直に征きにける伍長一人を 心にたもつ

この日頃 二

きほひ来し学徒も 今はおちつきて、おのも しづけき兵となりゆく  
近々と 山の<sup>ハクレ</sup>残雪のさびしきに、夕方早く 雨となりたり  
この日ごろ。深く身に沁む戦ひの夢に 目ざめつ。しづけき眠り

敵、まあしやる（\*マーシャル）に上陸す

つばらかに告ぐる戦果を きゝにけり。こゝに死にゆく兵らを われ知る  
若きらが たち征きて<sup>ノチ</sup>後 絶えぬしが、まさに はげしきたゝかひに入る  
<sup>ワタ</sup>洋なかの島に とよもし来たる<sup>アタ</sup>讐 つくして来よと <sup>セチ</sup>切にし思ふ  
<sup>オモカゲ</sup>佛に<sup>タ</sup>顕ちて 消えずも。はるかなる若き兵士らは 死なしめゝやも  
さ夜ふかく 心しづめて思ふなり。一人々々 みなよく戦はむ

\*

兵とある自覚を 深くおのがじしもてときとして、たかぶり来たる  
<sup>ナレ</sup>汝らが身は <sup>おほやけ</sup>公 びとの他あらめや 深くさとして、心しづめ居り  
宵早く 道の<sup>ハクレ</sup>残雪の凍て来るに、堪へがたく立ちて 兵をはげます  
<sup>ウカラ</sup>族 びとの深き思ひを 負ふ身なり。ますら雄ごころ ふりおこすべし

別れ来て

別れ来て、勤めに対ふすべなさよ。とほ<sup>ネ</sup>嶺のみ雪 あまり輝く  
春島に菜の<sup>す さ</sup>葉荒びしほど過ぎて、おもかげに 師をさびしまむとす  
<sup>ひむがし</sup>東に 雪をかうぶる山なみの はろけき見れば、帰りたまへり  
つゝましく 面わやつれてゐたまへば、さびしき日々の 思ほゆるかも  
朝けより 彼岸中日空低く、霰のはしる道を 来にけり  
人のうへのはかなしごとを しみじみと喜び聞きて、師はおはすなり

村田正言を憶ふ

かへり来て、夕日まだある空ひろし。さびしき死にを 思ひやまずも  
 今はまったく遙かになりし常徳じやうとくの いくさのさまは、伝ふることなし  
 一兵卒として 過ぎさがにけり。よき性の、心を離れず、一日すぎにき  
 年長く つひに 音なき汝が死は、思ひ見れども さびしかりけり

この日頃 三

春の日の 山にはたらく人音ひとおとの かゝはりなくて、しづかなりけり  
 雨ののち 照る日しづけき春の日の空に澄みゆく鳥は、さびしき  
 朝晴れて 芽ぶきに早カタき傍山コフシの 辛夷一もと 照り出でにけり

\*

営庭に 暁起きの肌寒く、兵をたゝせて 点呼をほを了る  
 しみじみと兵を諭して、うつらざるかたくな心に さびしくなりぬ  
 五六人の兵を起たしめて、民族のたぎる血しほをもてと 言ひ放つ  
 明けダ発ちの部隊を思ひ、夜ぶかきに ふたゝび目ざめ、ひそけとこき牀なり

ひそけき思ひ

さ夜ふかく 別れをのぶる顔々の、はればれしきに 思ひしむなり  
 民族の血のたぎり かく大いなる時ぞときとして、たゝしめむとす  
 たゝしめて後 ひそかなる思ひなり。深き夜空を仰ぎつゝ来ぬ

夜半ヨハのほうむ（\*ホーム）を 兵車アカハ明々いづるなり。このときめきを 親  
 知らざらむ

友をたゝしめて 心むなしきに、若者は、烈ことしき言を 我に告げ来る

幾たびか兵を教へて たゝしめぬ。今年の暑さ すでに 身にしむ  
 かくばかり 世界全土にすさまじきいくさの果ては、誰か見るべき  
 たちゆきて なほぞしづけき。大いなる作戦行動近きを おぼゆ  
 四十<sup>よそ</sup>ぢ人 歩兵少尉の友一人たちゆきてより、日々を しづけき  
 知り人の戦死の噂 あひ<sup>ツ</sup>過ぎて聞え来るなり。洋のはてより<sup>ワタ</sup>

#### 管外自然

公園の 朝しづけき水の上。花かきつばた 日ごろ咲きつぐ  
 柿若葉 つらつら照りて、ひた土にかすかに動く朝かげを 踏む  
 晴れつぎて 目ざめすがしき日ごろなり。朝空高く 鴉なき過ぐ  
 道のべの草を<sup>ヒラ</sup>壑きて 豆を蒔く児等よ。はげまね。汝が父のため  
 谷に這ふ<sup>クズバ</sup>葛葉も すでに肥えにけり。しづけき道に 馬をひき出づ  
 山上の池の<sup>たた</sup>湛へに 浮き満てる水藻を見れば、つらつら光る  
 わが馬の歩みしづけく なりにけり。尾根を越えつゝ、つぎの<sup>カヒ</sup>峽見ゆ

#### 昭和十八年 ——百首——

#### 家 居

兵とみし<sup>コソ</sup>去年の思ひのかそけきは、しづかに<sup>タギ</sup>激つ朝川の如  
 年深く にはかに召され立つ人の若々しきを、ねもごろ祝はむ  
 戦ひにゆかず かへり来て、あわたゞしく年かはりたる思ひの かそけき  
 朝庭の霜凍て土に 年あけて、こぞより来鳴く鶯の声  
 さびしみて 後ほがらかにゐむとすも。睦月明るき庭土の面  
 戦地よりとくかへり来し若者を 春の客とし、なごみて対す

睦月立つ 四<sup>ヨ</sup>日<sup>カ</sup>のしづけき。なほ晴るゝ空の深きに、息づかむとす

### 睦月の海山

たゝかへる春のしづけき。塩尻より 友をまじへて、木曾谷に入る  
 乗りつぎて入りゆく山は、雪浅し。夕冷えしるく おぼえあるなり  
 昏<sup>クラ</sup>ぐらと 山の空より淡雪のまひつゝ、なほぞ 汽車<sup>カヒ</sup>峡に入る  
 夕凍<sup>ジ</sup>みの家むら 山肌 雪浅し。汽車をおりて見おろす 福島<sup>フク</sup>の町  
 山の駅の 夕阪寒く出づる人。宿ある如く たち別れ行く  
 木曾谷の深きに宿り、朝目よく まむかふ山の冷え 身にひゞく  
 戦ひの春立つ山の つゝましき日毎おもほゆ。雪の浅きに  
 湯をいでゝ向ふ山の端の夕空は、山と辨<sup>ワカ</sup>れて いよゝ冴え来ぬ  
 木曾川の淀みに近くとまる駅。水照り返す朝の しづけき  
 明あかと 土に凍てつく雪の色。冬木荒れ立つ山の むなしさ

### 蒲 郡

波の秀<sup>ほ</sup>のあかり かすかに残るなり。きらめきて没<sup>イ</sup>りし日を 思ふなり  
 日の没りの暗<sup>う</sup>き海面<sup>なも</sup>に 対きてあて、睦月しみじみ 旅のかそけき  
 夜をふかしみつゝ、おちつくことのよき。ほてる（\*ホテル）のとばり閉  
 ぢて 久しき  
 朝目よく 知多の山なみ晴るゝなり。睦月八日の海遠く風ぐ  
 磯山に 凍て土乾くあはれさよ。踏みくづしつゝ ひゞくなりけり  
 朝の間の 島の社をまかり来し姥三人過ぎて、海<sup>うみ</sup>のあかるさ  
 正月の 家並みとぎせる海の町。人馬<sup>ジンバ</sup> とらつく（\*トラック） 明るく  
 とほる

## 修善寺

冬水の湛へに深く 棲む鯉の 浮き出で来るを、まもりゐにけり  
 霜凍ての屋庭を <sup>やには</sup> いくつのぼり来て、こゝにひそけき 範頼の墓  
 湯の村の睦月の道の ものげなさ。頼家の墓に来て もどるなり  
 とも <sup>たら</sup> 乏しらに足へる旅か。妹と夫の <sup>いも</sup> <sup>せ</sup> 写真を撮るを 見つゝ過ぎたり

## 風の音

春山の 木ぬれの風を仰ぎ来て、家群 <sup>ヤムラ</sup> さびしき <sup>たろ</sup> 田居に くだりぬ  
 庭さきは <sup>すほう</sup> 蘇芳 山吹咲き荒れて、峡田 <sup>イッ</sup> 明るく 人勤しめり  
 くぬぎ山。芽房 <sup>めぶさ</sup> のみどりはろばろに、風くだり来る寺の客 なる  
 芽ぶき山 つらぬきてとほる道の空。編隊つぎ来る 航空機の 音  
 村口の寺は 素壁の荒びゐて、くぬぎの萌え葉 山をしづむる

## 篁

おぼほしく 朝けをかすむ峡の空。川上とほく たぎつ水見ゆ  
 湯の村は 青葉に深き竹の秀の 曇りしづけき朝と なりけり  
 リンセン <sup>ミギハ</sup> 林泉の 汀に照れる <sup>イタドリ</sup> 虎杖は、一もとにして 立ちのしづけき  
 水の音 みちて澄み行く庭中は、若竹むらの たゞそよぐなり  
 春一日 いで湯に来たり、 <sup>ミムナミ</sup> 南のじやわ（\*ジャワ）へ行く人と すぐす  
 なりけり  
 峯近く 松にまじれる常磐木の つらつら照りて、日はゆふづきぬ

## 山 道

春の日に一日こもりて 降るなり。夕日にのこる朴の 白花

山岸は うまら うの花咲き乱れ、白じろけぶる雨となりゆく  
 足柄は 遠嶺の奥になほ晴れて、夕霧 すでに巔<sup>ミネ</sup>に くだりぬ  
 春一日 曇りとほせる夕海面<sup>ゆふニハ</sup>に、臥してしづけき初島<sup>シマ</sup>を 見つも  
 はろばろに 山西<sup>さんせい</sup>の奥ゆ還り来し人を思へど、逢ひがたく居り

### 青き起伏

暁闇<sup>アケグレ</sup>に いまだ月ある霧の空。夜鳥は木叢<sup>ボサ</sup>にひそみつゝ 鳴く  
 ほとゝぎすの 真昼しばなく原中は、四方の遠嶺の晴れて、さびしき  
 演習のとよみ 移りゆきて、山原は 青き起伏<sup>キフク</sup>にひそまれる昼  
 浅間嶺をつゝみし雲の 夕近く やゝ断れし間に、小浅間の出づ  
 原中の木むらにこもる 百鳥<sup>ももどり</sup>の夕ひと時の声 みちて来ぬ  
 山高原 夜の色となる霧の底に、まだ鳴きつゝて鳥の しづけき  
 鳴きみたる鳥は静まり、夕霧の下べに冴ゆる 青草のいろ  
 をちこちの木群<sup>コムラ</sup>のいろのさだまりて、高原ふかき夜霧と なりたり  
 浅間嶺の夜はのすがたと ひた澄める若者の魂<sup>たま</sup>に 我が触<sup>ふ</sup>りにけり  
 浅間嶺の夜はを とゞろに霹靂<sup>マムトキ</sup>す。このはげしきを 若人よ。聴け

### 盛 夏

南のむんだ（\*ムンダ）の陣の たゝかひのはげしきを感じ、夜はに目ひらく  
 山道にたち働ける自動車兵の、かひがひしきに 心はれ来ぬ  
 おしだまりて 日中歩み来し山かげに、くさりくねれる紫陽花の はな  
 身にしみて 山の木草はさやげども、心あそばず 夏ふけにけり  
 たへがたき土用つゞきの朝起きて、身に近く 人を悼みやまずも 波多

## 郁太郎君死ぬ

死は つひにさびしかりけり。をしめども すべてかひなきものになり  
ゆく

ほのぼのと <sup>ムツラ</sup>六浦の浜に立ち別れゆきにし日より 見ずなりにけり

みむなみに 相つぎて国独立す。我がいくさ人の 流血土<sup>ド</sup>のうへに  
重工場 ひけしづまりて、白々と 夕づく道は、山原にとほる

駅ごとに かならず<sup>タ</sup>征つ兵士 二三人ありつゝとよむ村々を すぐ  
墓原の盆夕時を人むれて しづけき村を、汽車に見下す

筑紫より帰還兵一人のぼり来て、いふ挨拶の 何ぞしづけき

若人の ことばとぎれは、ながかりし転戦のさまを 思ふなるらし

いやはてに昭南島ゆ かへり来し兵士を迎へ、ねぎらひもなし

必しも全きことのみ願はねば、還りし汝よ。語りくらさね

\*

さ夜ふかく 月 <sup>クワッ</sup>梶をさす明るさに、目ざめて思ふことの はげしき

虫のねの さすがに 夏のふけゆけば、いよゝしづけく たゝかひ身に沁  
む

## 湘 南

騒然と とらつく過ぐる道の空。鳶のとほ音の 海よりに澄む

かすみつゝひより <sup>さだま</sup>定る夏山の 空に舞ひ澄む鳶のはるけさ

## 一つ橋

町の空地に <sup>クウチ</sup>草のそよぐが目にたちて、夕照りながきひた土の おも

町中の 夕照り強き橋のうへ。すぎつゝひゞく 自動車のおと

## 若き人々

若くして征かむ学徒の ひとりひとりに、いたはれよ 身をと 言ひたかりけり

学校をいでて たゞちにたちむかふいくさのにはを 思ふなるらし

かへりみて 己がさびしきを言ふなかれ。若きをたのみ 国は戦ふ

航空隊に入ると昂奮<sup>キホ</sup>へる 若者の言たゞしきは、涙ぐましも

身にかけて 国の危きをなげき居るこの若き者も 親を思へり

親ありて言ひおこすことのふしぶしの、臆<sup>オク</sup>れたるをも 若きは嘆く

## 春寒し

人知れぬ怒りをもたらして かへり来ぬ。若きがゆゑに ゆるし難しも

人を さげすみて来し 道の空。桜を見れば、さびしまむとす

あかあかと 炎たちゆく庭芝の 底にしばらく火むらを たもつ

## 再、出でたつ

召され来て 五日ことなき起き臥しに、伊太利降伏の報道を 聞く

大君は 我をふたゝび召し給ふ。歩兵少尉の かずならねども

ふたゝびを召され来たりて、我を知るよき兵士らに 親しみにけり

若々しき将兵 多くたちゆきて、日毎秋づく兵舎に わが居り

わが馬のうしろにつゞき 兵がひく馬 馬、ひづめの音高く来る

叢<sup>くさむら</sup>を馬に喰<sup>は</sup>ませてうちむかふ 空の奥<sup>オクガ</sup>処の山の しづけき

山岸の葛葉の垂りの さはさはに、ひきつゝ 馬の 口やめずはむ

秋山は あまりしづけく晴るゝなり。家さかり来て 兵と起き臥す

かの若き兵らも すでに 南の基地に至りぬと聞けど かそけき

とほどほし 峽の奥処オクガに晴るゝ山 見放サけつゝ入る道の、ひそけき  
 公園の木立ちをぬけて わが通ふ道は、日暮れの 早くなりたり  
 病棟の 宵の点呼の やみてのち、空は すぎゆく風の むなしき  
 雨ののち 砂の流れのこまやかに、朝あした冷えある日ざしを 歩む

\*

子がいくさ かくひたぶるにありけりと、我にきかしめ、しづけかるらし  
 死にゆける若き命オギロの敬虔なり。かくひたぶるに 国はたゝかふ  
 いさましき空の軍を たのむなり。この家をいでて 子はすでに死す

### 鴿が音 追ひ書き その三 釋迢空

敵一機 琵琶湖東岸を北上すと まさに受信し、哨兵に告ぐ  
 我々にとつて、思ひの深い歌の一つである。最初、この歌集を出さうとしたのは、まだ、春洋が、硫黄島の守備に、生きてはたらいて居た時である。東京では、情報局や、報道部で、今日明日にも、本土に上陸して来さうだ、と公言して廻りながら、ひどくなつた戦争の実情については、国民に告げる勇気を失つてしまつた頃である。

さう鈍感でもないつもりだつた私もすら、「たづがね」と言ふ古語が、かの島に渡つた人々の運命をそろそろ前兆し初めてみたのに、気がつかなくかつた。其と言ふのも、さう言ふ心が、痛切には起つてゐなかつたからである。集の名を、古代の靈魂信仰に寄せて考へたのも、今になつて見れば、謂はゞ、いまましいはずの名だが、思へば、さう言ふ軽い物思ひを圧倒するほどの感情が、「われ人よりも」の心にあつたのである。此は当時の烈しい心持ちに生きた人々は、誰しも記憶の底に持つてゐるに違ひない。

草稿が出来あがると、この原稿を整理してゐた春部（注——伊馬春部）が、亦せはしなく、中部支那の戦場にたつて行つた。

急いで、報道部の検閲を受けると、暫らくして数个処の附箋をして返して来た。忘れもしない、此歌も、其一つであつた。ところどころ、その時の検閲人の判が、歌の脇にある。親泊（オヤドマリ）と言ふ苗字であつた。親泊は、沖縄固有の姓であつて、その同姓の幾人かを知つてゐる。たゞ偶然検閲人だつた親泊氏には、逢ふ機会がなかつたのである。確か当時少佐で、陸軍報道部に居たと言ふ人に違ひない。

戦争がすんで、いちはやく自決した人々の中に、この人の名が見えてゐた。まるで、他人とも思はれぬ黙会する心があつて、私を寂しがらした。この歌一つで見ると、実戦のものゝ様な誤解が起りさうだが……此は、其よりずつと早い、昭和十七年はじめて召集せられた時の連作中の一首であ

る。金沢の町における訓練空襲の夜、某百貨店の屋上に機関銃を据ゑた時の歌である。単に演習想定を心に持つて作ったに過ぎないので、親泊氏の指定では、一度「琵琶湖」といふ地名を消したらしいが、之を活して、「さしつかへなし」と書き加へてゐる。演習だと言ふことに、気がついたからである。私だけの考へ方に過ぎないかも知れぬが、この一聯の歌などは、戦ひの歌として、範圍も、雰囲気も、多くの人間の動きも、又都会の夜のしづけさも、ぴつたり把握してゐる。大きくて空しい時代の感銘——戦争の中の過ぎ去つた夢を、極めて静かな、虚空に映写してゐるやうな気がする。

春洋の作物には、これに似た印象を与えるものがあつて、読過の際、ちらとふりかへりたくなるものがある。「さうだつたか」と気がついて、一步ひつ返すと、もう何処へ行つたか、影も形もない。さう言ふ匂ひが感じられるか知ら。出来れば、心切に読んでやつて貰つて、さう言ふ機会に接してやつて頂きたいものである。

Orikuchi Harumi

日本ペンクラブ 電子文藝館編輯室

This page was created on May27, 2008

---

## 短歌・俳句

## 総目次